

〈特別寄稿〉

韓国 ‘高等学校国史’ 教科書における 韓日交流記述の特徴と変化

禹 仁 秀

〈Special Contribution〉

The Features and Changes of the Description about Exchange between Korea and Japan in the High School Korean History Textbook

Woo In-soo

1. はじめに

韓日の歴史の中で、両国間の技術交流は韓日関係のいろいろな側面からみても、その比重や重要性は、ほんの一部分であるとも言えよう。しかし、交流ということに限定して見ようとするのは、交流という点も一つの特徴として考えられるすばらしい独立された主題であって、何よりも両国の未来を大切にしていこうとする可能性が含まれていることに大きな意味があると思う。韓日の相互理解を通して、もっといい両国の関係を期待する目的があると考えられる。

歴史研究により、歴史的な真実が明らかになり、また明らかになった歴史的な真実は歴史教育を通じて後の世代へと伝えられる。このようなことから、韓日交流という側面が後の世代の教育の場でどのように教えられているのかを今の段階で検討してみることは大変意味のある作業であると考えられる。今日の歴史教育における教科書の比重は、だんだん弱化されていくところがあると思われる。それから生徒たちの韓日関係または日本に対する認識は、教科書よりかえって教師からの話、両親、新聞、テレビなどのマスコミよりもっと大きく影響を与えられているとも思われる。このようなことから教科書が歴史授業の基本テキストとして持っている比重は決して過小評価されるべきではないだろう。

現在、韓国の高等学校教育は2002年から第7次目の教育プログラムによって行われている。第7次の教育プログラムによる歴史教科目の編制は次のとおりである。人文系、実業系ともに高校1年の時は‘国史’を4単位（週2時間）と定められている。日本とは違って韓国の‘高等学校国史’教科書は、国史編纂委員会と1種図書編纂委員会と共同で編纂

する1種図書としての1種類しかない¹⁾。第7次の‘国史’教科書がそれ以前の教科書とは異なる大きな特徴は、はじめて分類史の体制をとったことである²⁾。時代順の配列ではなく、先史時代と近現代史のところを除いて、政治、経済、社会、文化など大きく四つの分類史の体制に合わせて内容が編成されている。そして‘国史’の扱っている範囲が前近代までで、近現代史の部分は極めて簡略に添加されている³⁾。

今まで歴史教育を巡って民間次元で両国の間で多くの交流が交され、また研究成果も相当蓄積された⁴⁾。教科書に書かれた韓日関係史記述の特徴が時代別に整理されるなど、特定の主題に対する研究動向や教科書の記述が証明されたりした⁵⁾。しかし韓日間の交流全般に焦点をしばって教科書を分析した研究はなく、新しく出た第7次目の教科書を分析の対象とした研究は、まだ始めたばかりである。

本稿では、韓国の高校で使われている‘国史’教科書において韓日交流と関連した記述部分の分析を通じて韓日交流に対する歴史教育の実態を探ってみたい。したがって、韓日交流と関連して主にとり上げる時期のほとんどが前近代の部分となる。まず教科書に現れた韓日関係と関連する単元と記述頻度程度を把握し、その後、第7次目の教科書を中心に時代別に韓日交流の記述内容とその特徴を調べてみることにする。最後に、記述上の変化とそれがもつ意味を前回の第6次目の教科書と比較することによって、これからの展望と方向を提示してみたい。

2. 教科書における韓日関係の記述頻度

韓国の歴史において日本は中国と同様に一番密接な関係をもって頻繁に接触した国である。この三つの国は昔から同じ文化圏内に属しており多くの交流が行われ、現在でもまたこれからもそうであると思われる。これは地政学的な側面からみて歴史的な宿命と同じことであろう。

このようなことから‘国史’教科書では、日本と関連する言葉や文章が頻繁に挙げられている。‘国史’教科書の前近代の時期に現れた論及の回数を調べてみると、三国時代20回、南北国時代12回、高麗時代17回、朝鮮時代67回と、合計116回にわたって論及されている⁶⁾。この数は、どの民族や国より論及の頻度が高くなっており、両国間で密接に交流していた関係を表している証拠であろう⁷⁾。

そして時代ごとに集中的に日本との関係を取りあげた独立された小単元や項目が次の表1のように設定されており、その記述の比重が推測される。

しかし、日本に対する頻繁な論及や独立された小単元及び項目の設定そのものは、両国の友好を保証することではない。なぜなら肯定的な側面の記述より否定的な側面の記述の比重がとても大きいからである。

表1 ‘国史’教科書の韓日関係の小単元と項目

	小単元 題名	項目 題名
三国時代	4. 日本へ渡って行ったわが文化	- 三国文化の日本伝播
南北国時代		- 日本へ渡って行った統一新羅文化
高麗時代		
朝鮮時代	5. 朝鮮初期の対外関係 6. 両乱の克服と対清関係 7. 対外関係の変化	- 日本及び東南アジアとの関係 - 倭軍の侵略 - 水軍と義兵の勝利 - 戦乱の克服と影響 - 日本との関係

‘国史’教科書を貫いている日本との関係に対する記述のほとんどは、日本が軍事的に力のあるときはよく韓国を困らせてきたことである。高麗末海岸地域に対する倭の無差別的な掠奪、正規軍隊を前にして侵略した壬辰倭乱や強い軍事力の近代の植民地支配などがその代表的な事例である。侵略による被害が強調されており、その侵略に対する克服過程も韓国の歴史の中ではたいへん重要な部分を占めている。侵略によって踏みにじられた韓国国民の自尊心を守ろうとすることは日本に対する韓国が文化的に優れていて、その優れた文化を日本に伝えたことを強調するという形で現れている。

‘恩恵’と‘侵略’という両極端を行き来する中で感情の幅が大きくなり、日本に対する冷静な客観的態度を維持することがたいへん難しくなったのである。

3. 時代別韓日交流の記述とその特徴

ここでは範囲を少し縮めて、韓日交流に対して時代別にわけて考察したい。交流の種類としては渡来人、帰化人、使臣の交流などの人的交流もあり、相互貿易や作物の流入などの物的な交流もあり、陶器、印刷、性理学などの技術・文化的な側面における交流もあったのである。以上のような両国間の多様な形の交流は独立された対外関係や対外貿易関連の小単元で行われる場合が一般的であって、その他には必要なところに適切に書き込まれている。

まず、三国時代と南北国時代の場合は韓日間の交流が活発に行われた時期であって、日本に大きな影響を与えたと強調して記述されている。「日本へ渡って行ったわが文化」が小単元の題名として設定されており、その細目として「三国文化の日本伝播」と「日本に渡って行った統一新羅の文化」とが設定されている。

では、「三国文化の日本伝播」の本文内容を見ると次のとおりである。

三国の文化が日本へ伝播され、日本の古代文化の成立と発展に大きく影響を与えた。

三国の中で日本と仲がよかった百済が三国文化の日本への伝授に一番大きく寄与した。4世紀に阿直岐は日本の太子に漢字を教え、次いで日本へ渡って行った王仁は千字文と論語を伝え教えた。6世紀には怒利斯致契が仏教と仏像を伝えた。このように伝えられた百済の文化を元にして日本が世界に誇る広隆寺の弥勒半跏思惟像と法隆寺の百済観音像が造られた。その他にも五経博士、医博士、暦博士と天文博士、採薬師、そして絵師、工芸技術者たちも渡って行ったが彼らによって木塔が立てられ、百済の伽藍様式が生れるようになった。

高句麗も日本の古代文化に大きく影響を与えた。7世紀のはじめに曇徴は紙や墨の製造方法を伝え、法隆寺の壁画を描いたと伝えられている。僧侶恵慈は聖徳太子の師匠となり、慧灌は仏教の伝播に大きく功を立てた。日本の奈良県で発見された高松塚古墳の壁画が高句麗の水山里の古墳の壁画とよく似ていることから高句麗の影響力がうかがわれる。

新羅は日本との交流は少なかったが、造船技術と堤防を築く技術を伝えて、韓人の池という名前まで生れるようになった。三国の音楽も伝えられ日本の音楽に大きく影響を与えた。

以上のように三国の文化は6世紀頃の大和朝廷の成立とともに7世紀頃の奈良地方で発展した飛鳥文化の形成に大きく影響を与えた。(260-261頁)

そのほか、本文にそえて‘三国文化の日本伝播’という題名の地図があり、その伝播の状況を再び明示的に提示している。これらによると高句麗は東海を渡って日本の敦賀地域に仏教、絵画、紙、筆などを、百済は日本の博多地域に儒学、仏教、絵画、天文、暦法などを、伽倻もやはり博多地域に陶器の製作技術を、新羅は日本の岡山に造船術と築堤術を伝えたと記述している。それから敦賀、博多、岡山などに伝えられたものがその後奈良地域に伝えられるようになったとしている。(260頁)

日本との物的な側面からの交流も地図で整理されており、その状況も韓国側から日本へ輸出したということを中心に整理されている。つまり高句麗は海豹皮、毛皮類を、百済は穀物、織物類、新羅は穀物、絹などを輸出したと記述している。(138頁)

その他に早くから伽倻の小国たちは豊富な鉄の生産と海上交通を利用して倭の九州地方と貿易したことを記述している。(51頁) また、百済の進んだ金属技術を論じたところでは優れた製鉄の物証として4世紀後半に百済で製作して日本へ送った七支刀を挙げており、(249頁) 七支刀の絵による説明では‘百済と倭との交流関係を示す遺物として現在日本の石上神宮に保管されている’。(249頁) と紹介している。

次に「日本へ渡って行った統一新羅の文化」項目の本文内容をみると次のとおりである。

三国文化に次いで統一新羅の文化も日本へ伝えた。統一新羅の文化の伝播は日本から派遣された使臣によって行われた。元暁、強首、薛聡らが発展させた仏教と儒教の文化は日本の飛鳥文化の成立に寄与した。特に審祥によって伝えられた華嚴思想は日本の華嚴宗を広めるのに大きく影響を与えた。

しかし8世紀末になって日本の首都を平安に移してからは外国文化の影響から脱しようとする動きが起こった。

白鳳文化に対する補充説明においては“7世紀後半に発達した日本の古代文化として唐と新羅の影響を多く受けた。仏像、伽藍配置、塔、律令と政治制度で新羅の仏教と儒教の影響が大きかった”と本文を補って説明を付け加えている。

貿易と関連しては統一新羅の場合“はじめは日本との交流を制限したため貿易が盛んに行われなかったが、8世紀になって活発になった。”(142頁)と紹介し、貿易路を描いた地図には蔚山と清海鎮からのそれぞれ博多につながる貿易路が描かれている。(142頁)それから渤海の場合も“渤海は日本との外交関係を重視して貿易を活発に行い、その規模も大きくて一度に数百人も行き来していた。”(144頁)と日本との貿易外交関係を特記している。

一方、高麗時代の日本との関係はそれほどではなかったと記述している。すでに日本が8世紀末から外国文化の影響からぬけようとする動きがあったと紹介し、その原因の一端はすでに説明したところである。しかも交流が全く行われなかったということではない。“日本は11世紀後半から行き来しながら水銀、硫黄などを持ってきて食糧、人蔘、書籍などと交換して行った。”(156頁)と記述して、相互交流の状況を伝えている。それは日本側から韓国へ持ってきた品物がはじめて教科書に明記されたことに意味があるだろう。

朝鮮時代における日本との関係は、安定的な交流と相互対立の繰り返しが描かれている。朝鮮前期には三浦開港による物的交流の側面が強調されたが、壬辰倭乱という侵略で帰結され、朝鮮後期には再び通信使の往来による友好的な関係が結局侵略と植民地支配と帰結された事実が主な主題として記述されている。

まず小单元「朝鮮初期の対外関係」の細目として設定された「日本及び東南アジアとの関係」というところの本文の中で、日本と関連した内容は、次のとおりである。

朝鮮は日本や東南アジアの諸国との交流には交隣政策を原則的に進めた。高麗末から朝鮮初期まで続いた倭寇の侵略で、海岸地方の百姓たちは山の奥へ逃げて行って農事ができないほどであった。これに対して朝鮮は水軍を強化し、性能の優れた戦艦を建造した。特に火薬武器を開発して船舶に装着するなど倭寇撃退に努めた。

これによって侵略と略奪が難しくなった倭寇たちは平和的な貿易を要求するように

なり、朝鮮は一部の港を開放して制限された貿易を許した。しかし、その後も倭寇の略奪が続き、これを強力に戒めようと倭寇の巢窟である対馬を討った。同時に倭寇の要求を受け入れて南海岸の釜山浦、齋浦（昌原）、塩浦（蔚山）など3浦を開放して貿易を許し、次いで癸亥約条（1443）を締結して限られた範囲内で交易を許した。
(109-110頁)

しかし16世紀に入ってから比較的平和であった両国の関係において対立が高まりはじめた。1510年の三浦倭乱、1555年の乙卯倭変がその代表的な例である。その後1592年壬辰倭乱が起り大規模で全面的な侵略戦争によって両国の関係は完全に打ち切られて、相互の信頼も大きく傷付けられた。これらに関することは教科書で詳しく記述されているが、本稿の主題とは少し離れているため省略する。

文化の伝播は戦争の中でも続けられてきた。活字印刷、陶器技術、性理学などが代表的にとり上げられている。壬辰倭乱の日本に及んだ影響と関連して、教科書の本文と補充説明文にそれぞれ次のように記述されている。

- － 壬辰倭乱は対外的に日本の文化が大きく発展をはかる動機となった。日本は朝鮮から活字、絵、書籍などを略奪して持ち帰り、性理学者と優秀な活字印刷技術者及び陶器技術者などを捕虜として連れていき、日本の性理学と陶器文化の発達のもととなった。(113頁)
- － 李參平をはじめ陶器技術者たちは日本へ引っ張られて、日本の陶器技術の発達に決定的に寄与した。このため壬辰倭乱を陶器戦争とも言う。(113頁)
- － 李滉の思想が壬辰倭乱の後日本へ伝えられ、日本の性理学の発展にも影響を与えた。(294頁)

壬辰倭乱の後、しばらくの間打ち切られた韓日の交流は再開された。これは日本側の要求からはじまり使臣交換にまで発展されたが、その主な理由は日本側の厳しい経済的打開と先進文化輸入の欲求、そして何よりも政権の安定をはかろうとする政治的な目的があったことが大きな原因として指摘されている。小単元「対外関係の変化」の細目である「日本との関係」のところの本文内容をみると次のとおりである。

壬辰倭乱で侵略された朝鮮は日本との外交関係を断絶した。しかし日本の徳川幕府は厳しい経済の対策として、先進文物を受け入れるために対馬島主を通じて朝鮮に国交の再開を要請してきた。朝鮮は幕府の事情を聞いてから、戦争の時捕らわれた人たちを連れてくるために惟政（四溟堂）を派遣して日本と講和し、朝鮮人捕虜7,000名

あまりを連れてきた(1607)。次いで日本と己酉約条を結び、釜山浦に再び倭館を設けて制限した範囲内での交渉を許した(1609)。

一方、日本は朝鮮の先進文化を受け入れ、徳川幕府の将軍が変わるたびその権威を国際的に認めてもらうために朝鮮に使節の派遣を要請してきた。これに対して朝鮮は1607年から1811年まで12回に渡って通信使という名で使節を派遣した。通信使の一行が多いときは400人あまりになり、日本においては国賓として礼遇した。日本はこの人たちを通じて朝鮮の先進学問と技術を学ぼうとした。従って通信使は外交使節の役割だけではなく朝鮮の先進文化を日本に伝播する役割もした。(130-131頁)

そして、通信使の行路を陸路と海路とわけて表した地図が添付されており、補充説明として“日本にはこれらの行路に従って通信使と関連する遺物や遺跡が多く残されている。”としている。そして1711年(肅宗37)に派遣された朝鮮通信使の行列も中心の正使の行列部分が(131頁)絵で提示されている。

このような政治的、文化的な側面から友好関係になり、17世紀以後からは経済的な交流もたいへん活発に展開されたと記述されている。倭館開始を通じて活発に展開された貿易には、朝鮮は人蔘、お米、木綿などを売って、清から輸入した品物を引き渡す中継貿易もあり、反面日本からは銀、銅、硫黄、胡椒などを輸入したと記述している。(181-182頁)貿易は正常的な開市だけではなく密貿易の後、市も私商たちによって活発に展開されていたことも補充の説明と地図に表記している。

以上の朝鮮時代の日本との交流も貿易を通じて物的交流の場合を除くと朝鮮から日本へ伝えたことに対して多く記述されている。ただし経済構造と経済生活の段落の重要年表には、1763年に‘さつまいも(甘藷)の伝来’が表記されている(135頁)こと(これも日本から伝来されたという記録はない)と、韓致淵の海東繹史という歴史書を編纂しながら日本の資料を参考にした(316頁)という事実に関する指摘などが朝鮮に及ぼした日本からの影響として把握されているだけである。

4. 韓日交流の記述の変化

韓国の歴史教科書の日本関連の記述も、歴史的な認識の変化、新しい研究成果の出現、誤りや失敗に対する学界からの指摘などを受け入れ続けて修正されてきた。ここでは第7次‘国史’教科書とその直前の第6次‘国史’教科書との比較を通じて最近変化のあった部分を調べてみたい。

韓国は第7次教科書においては韓日関係の記述が多方面で修正された。日本を客観的にみようとする努力が見受けられる。これは新しく書かれた第7次教科書と第6次教科書と

の比較からみてもすぐにわかる。全面的に変わったところはないが、記述の内容も一部変わったところがあり、記述方法も変化しており、また日本と関連する論及の回数も若干変化したのである。多くの変化の中で特徴的な変化のいくつかを挙げてみると次のとおりである。

一番目に、韓日関係の記述比重が多少多くなったのである。特に高麗時代の韓日関係の記述の比重が少し多くあったため時代別のアンバランスが均等になった。これまでのあまり交流がなかった時期つまりあまり注目されていなかった部分から前向きになった面がある。これは前後の時期とある程度の均衡のための意図であるとも思われるような、分類史の体制が変化し社会史のところが多く補足された。そして渤海と日本との関係についても記述分量が多くなった。

二番目に、日本に影響を与えたとする記述の表現が随分緩和された。一方的な影響の強調から客観性を保持しようとする努力の一つとして考えられる。例えば次の表2のとおりである。

表2 第6次の教科書と第7次の教科書の表現強度の比較

第6次教科書(1996年)	第7次教科書(2002年)	比較
百済は6世紀中頃日本に仏教を伝え、多くの僧侶を送り日本仏教の <u>基礎を固めた</u> 。(上85)	(百済)聖王は…日本に仏教を <u>伝えたりした</u> 。(54)	基礎を固めた→伝えたりした
新しい品物を持って日本へ渡って行ったわが国の人たちは古代の日本人を <u>教化させた</u> 。(上100)	三国の文化が日本に伝播され日本の古代文化の成立と発展に大きく <u>影響を与えた</u> 。(260)	教化→影響
この地三国の音楽も伝えられ、高句麗楽、百済、新羅楽などの名前まで生じて、 <u>日本の音楽の主流となった</u> 。	三国の音楽も伝えられ、日本の音楽に <u>大きく影響を与えた</u> 。	主流→大きく影響
このように三国時代にわが国の流移民たちが日本列島に渡って行って、先進技術と文化を伝え、大和政権を <u>誕生させて</u> 日本古代の飛鳥文化を成立させることに <u>尽くした</u> 。	このように三国の文化は6世紀頃の大和朝廷の成立と7世紀頃奈良地方で発展した飛鳥文化の形成に <u>大きく影響を与えた</u> 。(261)	誕生、尽くす→影響
特に審祥によって伝えられた義湘の華嚴思想は日本の華嚴宗を <u>大きく興こしたりもした</u> 。(上101-102)	特に審祥によって伝えられた義湘の華嚴思想は日本の華嚴宗を <u>興こすのに大きく影響を与えた</u> 。(261)	大きく興こしたりもした→興こすのに大きく影響を与えた
それから東アジアの文化的後進国であった日本は、朝鮮から活字、書籍、絵、陶器、などの文化財を略奪し、大勢の技術者や学者などを拉致して行った。これらと一緒に朝鮮の性理学も伝えられ、日本の文化発展に <u>大きく影響を与えた</u> 。(上187-188)	壬辰倭乱は対外的に日本の文化が大きく発展できるように <u>動機付けを与えた</u> 。日本は朝鮮から活字、絵、書籍、などを略奪して、性理学者や優秀な印刷技術者及び陶器技術者などを捕虜として捕らえて行って、日本の性理学や陶器文化の発展に基礎を固めた。(112-113)	大きく影響→動機付け
(李滉)彼の思想はわが国だけではなく日本の性理学の発展に <u>大きく影響を与えた</u> 。(上214)	李滉の思想は壬辰倭乱後日本に伝えられ、日本の性理学の発展にも <u>影響を与えた</u> 。(294)	大きく影響→影響

三番目に、日本と関連する記述において客観性を保とうとした。記述そのものにおいても両国の状況をできるかぎり客観的に記述しようとする傾向が高く、例えば次のとおりである。

三国と統一新羅の文化が日本に及ぼした影響について説明した後、“しかし8世紀末に至って日本が平安遷都からは外国文化の影響から脱しようとする動きが起きた。(261頁)”という今までなかった説明を添加している。これは以後日本文化の独自性確保のための努力を評価することだけではなく、次の高麗時代における日本との関係が多少疎遠された原因を理解するに役に立つことである。

壬辰倭乱の前後のいろいろなことに対する記述が客観性を維持しようとする努力が多く見られる。まず壬辰倭乱の起きる前の状況を記述する過程で、第6次教科書においては三浦倭乱をはじめ倭寇の騒乱がよく起きたという事実そのものだけの指摘にすぎないが、第7次教科書においては三浦倭乱や乙卯倭変が起きた原因として、日本人の増加した貿易要求に対する朝鮮政府のコントロール強化を指摘している。このような説明は日本人たちの騒乱が単純な略奪欲からではなく、その裏には貿易と関連する経済的な利害関係があったことを理解するのに役立つのである。

壬辰倭乱が終わってから朝鮮と日本との外交関係が再び正常化され通信使が派遣される過程に対する説明においては、第6次教科書においては“日本は朝鮮を文化の先進国として使節の派遣をお願いしてきた。(下22-23)”と朝鮮を先進国としての地位だけを強調しているが、第7次教科書においては“日本は朝鮮の先進文化を受け入れ、徳川幕府の将軍が変わるたびその権威を国際的に認めてもらおうと朝鮮の使節の派遣を要請してきた。(130-131)”と日本の先進文化の受容意志の他に、集権者の政治的な目的を添加することによって国交再開の原因をより詳しく表現している。

表3 第6次の教科書と第7次の教科書の表現の客観性の比較

第6次教科書(1996年)	第7次教科書(2002年)	比較
倭寇を操縦していた日本の封建領主たちは略奪行為が難しくなると <u>交易を懇請して</u> きた。朝鮮はこれをきっかけに交隣政策として癸亥約条を締結して限られた朝貢貿易を許した。(上184-185)	これによって侵略と略奪が難しくなった倭寇たちが平和的な <u>貿易関係を要求してく</u> ると、朝鮮は一部の港を開放して限られた貿易を許した。(109-110)	懇談→要求
従って日本は経済的な厳しさを経た。戦乱後成立された日本の徳川幕府は先進文物を受け入れようとして対馬島主を通じて交渉の許しを朝鮮に <u>懇請</u> した。(下22-23)	壬辰倭乱で侵略された朝鮮は日本との外交関係を打ち切った。しかし日本の徳川幕府は経済的厳しさを乗り越えて、先進文物を受け入れるために対馬島主を通じて朝鮮に国交を再開するよう <u>要請</u> してきた。(1609). (130-131)	懇請→要請
日本での明治維新、…ただし日本だけが西洋列強と <u>すばやく</u> 妥協して積極的に近代化政策を進めた結果、帝国主義の列強の隊列に入るようになった。(下5)	日本における明治維新、…ただし日本だけが西洋列強と妥協して積極的に近代化政策を進めた結果、帝国主義の列強の隊列に入るようになった。(120)	すばやく 削除

四番目に、用語においても客観的で適切なものを使おうと努力している。日本に対して少しへりくだった表現やよくないニュアンスの表現が客観的な用語へと変わった。例えば次の表3でわかるように交易を‘懇請’したを‘要求’したという表現を使い、交渉を‘懇請’したを‘要請’したという表現に変わったことが挙げられている。また日本の近代化を西欧から受け入れた事実に対する説明にも、従来は“日本だけが西欧列強とすばやく妥協して積極的に近代化の政策を進めた結果、帝国主義の列強の隊列に入れられた。(下5)”というところから‘すばやく’という表現を削除した。ここでの‘すばやく’という表現は大人しくなかったというニュアンスの表われであろう。

5. おわりに

以上のように韓日交流に対する‘国史’教科書の記述は相当の部分が客観性をもつ方向へと変化してきたことがわかる。このような変化は今までの学界の研究成果によることでもあるし、またもう一段階に成熟した社会の様子から縁由されたことであろう。今後このような変化はもっと好ましい方向へと進展されると思われる。

韓日の交流は韓日関係の学習に重要な一部分であろう。ともすれば対立ばかりが強調される可能性のある日本をみる見方を微弱でありながら均衡を保つ役割をしていると言えよう。もちろん‘交流’という事実が‘侵略’を相殺させるには無理があるが、歴史をみる多様な見方を広げている点においては、両国の未来の関係設定には役に立つ歴史的な経験だと認識しなければならない。

しかし、あまり肯定的な側面ばかりを強調するための交流が利用されることは避けるべきであろう。また交流において一方的な影響ばかりを強調することによって、むしろ相手に対する敵対感の強度をより大きくする方便として利用されることも警戒すべきであろう。相互の差を尊重する認識転換と歴史的解釈における客観性を高める努力が要求されると思われる。

いずれにしても‘国史’という教科目から民族を脱却させることができないとするならば、そのなかで客観性を高める努力を尽くすことが最善の方策であろう。そのような努力が両国の間でお互に行われ、次の世代にはより良い関係として発展させていくためのものとなるように願っている次第である。そのために、民間レベルでの対話が拡大され蓄積される必要があるということはいくら強調してもしすぎない。なぜなら、このような結果は結局次の世代の歴史教育へと伝えられるからである。

注

- 1) 本稿に使った教科書は次のとおりである。国史編纂委員会・一種図書編纂委員会、『高等学校国史』、(株)斗山、2002。以下『高等学校国史』教科書は‘国史’教科書と略称する。なお、本文中の括弧の中の数字はこの教科書のページを表す。
- 2) 第7次国史教科書の諸般特徴に関しては次の論考を参考していただきたい。禹仁秀、「第7次教育課程高等学校国史教科書の内容分析」、『歴史教育』84、歴史教育研究会、2002。
- 3) 韓国近現代史は人文系高校2・3年生の中で選択した学生に限って学ぶようになっている。つまり八つの社会科目の中から選択するようになっており、その中の歴史科目は‘韓国近現代史’と‘世界史’が含まれている。現実的に先の二つの科目両方を選択するか両方とも選択しない場合はほとんどなく、二つの中から一つを選択するケースが多い。しかし実業系高校の場合は歴史科目が一年生の時‘国史’だけである。‘韓国近現代史’と‘世界史’は検認定の各4種の教科書が出版されている。
- 4) 歴史教育や歴史教科書を中心に、今まで行われた韓日間の学術交流は次の論考にまとめられている。鄭在貞、「争点と課題：韓国と日本の歴史教育」、『歴史教科書の中の韓国と日本』、図書出版慧眼、2000。
- 5) 代表的なこととしては歴史教科書研究会と日本の歴史教育研究会の活動があげられる。二つの団体における今までの研究成果は次の書物によくまとめられている。歴史教科書研究会・歴史教育研究会、『歴史教科書の中の韓国と日本』、図書出版慧眼、2000。
- 6) 一つの文段の中で数回日本が論及されても一回と処理した。
- 7) 例えば、以前の第6次教科書においては三国時代28回、南北朝時代13回、高麗時代6回、朝鮮時代64回と、合計111回に渡って論及された。国史編纂委員会・一種図書編纂委員会、『高等学校国史(上、下)』、大韓教科書株式会社、1996。それから本文の中で、第6次教科書の内容と関連する記述の中に提示された括弧の中の数字はこの書物のページを示す。

キーワード：教科書 国史教科書 韓国歴史教育 韓日交流 韓日関係

Keywords: Textbook, Korean History Textbook, Korean Historical Education, Culultural Exchange between Korea and Japan, Relations between Korea and Japan